

論文の内容の要旨

論文題名

化学療法を施行した進行大腸癌患者の大腰筋筋量と栄養状態の経時的变化

掲載雑誌名

昭和学会雑誌(81 巻・印刷中・2021 年)

保健医療学専攻博士後期課程生体機能・形態解析領域 井口暁洋

内容要旨

がんリハビリテーション対象患者のリハビリテーション介入時期における明確な介入指針は示されていない。化学療法を継続する要件として活動性の指標である Performance Status (以下 PS) 0 から 2 を継続出来ていることがあげられる。我々は、現状のリハビリテーション依頼よりも活動性の高い早期から、リハビリテーション介入することで PS 維持につながるのではないかと考えている。本研究では化学療法を行った進行大腸癌患者を対象に、歩行などの ADL 能力に関係が強い、大腰筋を CT DICOM データから 3 次元大腰筋モデルとして作成し、その体積を大腰筋筋量として計測した。計測時期は診断時、前悪液質期、終末期(死亡 1 か月前)にわけて、経時的な調査を行った。研究の計画段階では終末期にかけて、大腰筋は減少することが予想されたが、実際の結果では診断時から前悪液質期までに有意に減少し、前悪液質期から終末期にかけては有意な差を認めなかった。またリハビリテーション介入例は終末期でも、非介入例と比較すると大腰筋体積に有意な増加を認めなかったが、大腰筋体積が減少した症例は有意に少なかった。結果からリハビリテーション介入に関しては、可能な限り早期に行うことが望ましいことが示唆された。そして終末期においては、筋量の増加は困難であっても歩行や ADL に関係のある大腰筋体積を減少させない可能性があるので介入の検討をするべきであると考えられる。